

学生大使 実施報告書

氏名：村上 唯花

学部・学科(コース)・学年：

人文社会科学部・人文社会科学科・グローバル・スタディーズコース・1 年

派遣先大学：ガジヤマダ大学

派遣期間：2025/02/27-2025/03/11

I 日本語教室での活動内容

【授業時間】

月曜日から金曜日までの平日午前 10:00-11:30、午後 13:30-15:00 までの各 90 分間、1 日計 2 回実施。

【授業形式】

ひらがな・カタカナとコミュニケーション(会話形式練習や文法等)の 2 つの分類を設けた。現地人 2-3 人の小グループに対して日本人がつく形で授業を実施した。授業開始当初は、始業してから生徒に呼びかけを行いグループに各自分かれてもらっていた。だが、授業のはじめと終わりの区切りがなくおざなりになってしまっている側面があった。そのため、教室に入ってもらう段階でグループに分かれてもらうよう指示を出すように変更を行った。また、教える側の日本人もひらがな・カタカナ担当とコミュニケーション担当で区分するとともに、はじめと終わりの指示出しを行う担当を決定した。以上のような改善を行うことで、当初に比べてスムーズな進行が実現できた。加えて、担当を決めることで事前準備が可能になりより深い内容を生徒に教えることができたと考える。

【授業内容】

月曜-木曜は通常授業を実施した。内容としては以下の通りである。

・ひらがな・カタカナ：

持参したホワイトボードを使用し、1 つずつ書き順を提示しながら生徒と一緒に書く練習を行った。工夫した点としては、ひらがな・カタカナを教える途中で、日本語の単語を教える等実践的になるよう意識した。また、淡々と教えるだけでは退屈させてしまうと考え、会話を重視する授業形式を取るようにした。

・コミュニケーション：

授業開始に生徒に学びたいことを確認した上で、授業を行った。内容としては、基本的に自己紹介の練習・助動詞・文法を教えた。難易度があがるため、生徒から質問をしていただくことが多かった。間違ったことを教えないように、自身の知識を確認しながら相手に理解してもらえよう丁寧に説明することを意識した。

【学生大使 実施報告書】

金曜日は文化交流を行った。

・文化交流：習字・折り紙・あやとり・けん玉・カルタを実施した。遊びごとに数名の日本人が担当し、現地学生が好きな場所に体験しに行く形式をとった。私は、折り紙を担当した。英語で折り方を説明することは、難しかったが生徒が喜んでいて様子が印象的であった。

2 日本語教室以外での交流活動

宿泊施設から大学までの移動と、昼食時間は常に数名のバディーが行動を共にしてくだった。また、放課後には買いものに行くとともに、宿泊施設のロビーでバディーと話す時間があり交流を深めることができた。休日には、ビーチやボロブドゥール遺跡等ジャワ島の観光施設を満喫することができた。多い時には、日本人学生と同人数ほどの現地学生が行動を共にしてくれる日もあり毎日充実した時を過ごすことができた。

3 参加目標への達成度と努力した内容

私は、当プログラム参加にあたって「自ら発言する姿勢を持つ」、「相手の文化を知る」、「教える姿勢を学ぶ」という3つの目標を掲げた。

1 つ目の目標である「自ら発言する姿勢を持つ」ことは達成できたと考える。現地人が積極的に声掛けを行ってくださったこともあり、自身の意見を表明することに抵抗がなくなった。たとえ相手にすぐには伝わらなくても、伝えることで変化があることを身をもって体感した。そのため、日数を重ねるごとに積極的な対話を実現することができたと考える。

2 つ目の目標である「相手の文化を知る」ことは、ほぼ達成できたと考える。私たちが渡航した期間はラマダンの時期であり宗教的側面を身近に感じる事ができる時期であった。宗教的面に関しては、質問しづらい面もあったが現地人が嫌な顔をせず答えてくれたため疑問に思うことを質問することで、相手の文化に対して知識を深めることができたと考える。だが、日数が経過してから質問することができるようになったため、もう少し相手の文化を知る機会があったのではないかと後悔が残る。

3 つ目の目標である「教える姿勢を学ぶ」ことは、もう少し努力が必要であったと考える。今まで当たり前のように使用していた日本語を、言語化して教えることは難しく苦戦する場面が多かった。生徒からの質問を答える際にも、相手に納得してもらえ説明がなかなかできない場面が存在した。そのため、事前準備を怠らないとともに相手の様子を踏まえた教え方を意識すべきであると感じた。

4 プログラムに参加した感想

滞在期間中は、常に笑っていたのではないかと思うほどとても楽しく濃密な時間を過ごすことができた。渡航前は、不安と緊張でいっぱいであった。だが、帰国直前になると帰りたくないと思うほどの気持ちの変化があった。日本と違う面が多く苦勞することもあったが、それ以上に新たな発見があった。また、インドネシアの現地人の優しさに触れた約2週間であった。本プログラムに参加してよかったと心から思っている。

5 今回の経験を踏まえた今後の展望

本プログラムを通して、教えることの難しさと会話の楽しさを実感した。

【学生大使 実施報告書】

日本語を教える上で、自身の知識を土台とした伝え方を重要であると感じた。私は、今回渡航前の準備不足があり相手に教えることに苦戦した場面が多くあった。何事も事前準備をしっかりとすることで、相手に自身を持って伝えることが可能になると考える。また、教える上で生徒が質問しやすい環境を整えることが必要であると感じた。一方的に、教えるだけではお互いに成長につながらないと思う。グループ形式での授業では、対話形式で教えることで知識が深まるとともに、仲が深まると感じた。今後は、物事に取り組む前に事前に準備を行う姿勢を取るとともに、自ら発言することを意識していきたい。

現地では、日本にいてはなかなか経験できないほどたくさんの方々と会話をした。積極的に話しかけてくださる現地の方々のおかげで、私も会話を楽しむことができた。私は、複数人の場面において自ら話すことが苦手であるが今回は自身の意見を表明することができた。今回の経験を糧にして、自ら話すことを恐れず会話をしていきたいと思う。

結びに、貴重な経験をさせていただいた本プログラムに関わるすべての方々に感謝いたします。

6 現地での活動写真

写真1

日本語教室の様子



【学生大使 実施報告書】

写真2

現地の人のお家にお伺いしたときの集合写真



写真3

お誕生日祝い集合写真



写真 4

OBELIX でのパフォーマンス

